

学術研究所主催 主題別研究会 報告要旨(1)

第4回 子育て・家族研究会

日時：平成17年4月20日(水) 13:00~14:30

場所：第2会議室

話題提供：富田庸子(児童学科・講師)

話題：ありのままを受け入れ、伝え続ける

—Open Adoption 家族のテリング—

1. はじめに

“家族”とは何か。そして“親子”とは何か。—少なくとも日本では、血のつながりのある親子こそが“実の”親子と呼ばれている。しかし、血縁が親子関係を保証するものではないこと、血縁がなくても親子関係を構築できることは、現実がすでに証明している。

筆者は、従来の発達心理学研究の中でともすると見過ごされてきた非血縁家族に注目し、そのひとつのかたちとして、オープン・アダプション (Open Adoption) という養子縁組形態により子どもを迎え育てている家族の協力を得て、研究を進めている。

意識的努力をもって作り出されていく家族の心理学的特徴を検討することによって、家族や親子という関係機能の本質に迫りたい。

2. オープン・アダプション

子どもの権利条約は、子どもが親を知り、自分のアイデンティティを保持する権利を謳っている。近年、欧米の養子縁組は、血縁がないことを事実として受け入れ、生みの親の存在を否定しないことが子どもの成長にとって有益であるとの観点から、オープン・アダプション (生みの親と育て親家族との間に何らかのコミュニケーションがある養子縁組) が主流となりつつあり、その有効性についての研究が積み重ねられている (Baran & Pannor, 1990; Grotevant et al., 1994; Goodman et al., 1997 など)。

一方、日本では、養子縁組斡旋機関の扱う縁組のほとんどが、秘密厳守と匿名性を強調し、生みの親と育て親家族とのコミュニケーションが一切行われないクローズド・アダプション (Closed Adoption) である (桐野, 1998)。また、血縁重視の風土の中で、血のつながりがないことを子どもにも周囲にも隠し続ける傾向が依然として強いといわれている。

3. テリング

こうした現状の日本においても、オープン・アダプションを推進している機関が少数ながら存在する。そこでは、育て親が子どもに、血縁のある親が別に存在する事実を幼い時から継続的に伝え続け、子どもの理解を形成しようとしている。この試みは“テリング (telling)”と呼ばれ、“真実告知”というよりはむしろ“語り聞かせ (storytelling)”に近いものである。テリ

ングにおいては、生みの親の存在をはじめ子どものルーツに関わることがらは、ある日突然打ち明けるものではなく、また、一度告げて終わるというものでもない。日常の中で、子どもの成長に応じて伝え続けられるものなのである。

オープン・アダプション家族におけるテリングの実践は、特に日本という血縁意識の強い社会の中で、親子それぞれにどのような影響をもたらすのであろうか。筆者は、テリングの効果について、以下の仮説を想定している。

子どもへの効果：生みの親がいて、自分がいる、そして今の家族がある、という存在のつながりを、テリングを通して理解していくことができる。自分のルーツと現在のつながりを明確化することによって、アイデンティティ形成の基盤が獲得される。

育て親への効果：生みの親の存在なくして現在の家族は形成されないということ、つまり、生みの親・子ども・育て親という三者関係こそが自分たちの存在する場であることを、テリングを通して自然に意識化することとなる。子どもをひとりの人間として尊重し、そのライフストーリーの形成を支えることが、生成継承性 (generativity) の実践につながる。

親子関係への効果：嘘偽りや隠し事なく、ありのままを受け入れて誠実に子どもと向き合おうとする親の態度がテリングを通して子どもに示されることは、相互間の信頼と尊重に根ざした親子関係の構築につながる。

4. 研究結果の紹介

上記の仮説を踏まえ、日本においてオープン・アダプションを実践している家族85組に対して行った研究結果の一部を概説する (富田ほか、2004；富田・古澤、2004 など)。

テリング実施状況と不安：①育て親の6割近くが、子どもが3歳になる前からテリングを行っている。②テリングは、日常のくつろいだ雰囲気において、主として母親が、自然の会話の中で行うことが多い。③育て親たちは、幼い頃からのテリングを、子どもの理解を期待する以前に「伝え続けることに意味がある」と捉えている。④生みの親に対する共感的理解が存在している。⑤乳児期からテリングを始めた育て親群のほうが、幼児期以降開始した群よりも、テリングにおける不安が低い。

テリングの内容と子どもの反応：①生みの親も育て親も共に子どもを大切に思う気持ちが、子どもの状況にあわせて誠実に伝えられている。②3歳頃と就学頃に、テリングの節目が感じられる。③思春期以降のデータは十分に蓄積されていないが、様々な葛藤が生じる可能性が高い。そこでは、オープン性を強調する養子縁組ならではの育て親同士および子ども同士のネットワークが、重要なサポート資源となりうることが示唆された。

5. おわりに

今後は、さらに多様な角度から実証的・横断的研究を積み重ねて、テリングという相互世代的なプロセスによって子どもの断片的なアイデンティティがトータルアイデンティティへと統合されていく過程を検討し、テリングのもたらす意味を考えていく。

社会は様々な家族を生み出している。生殖補助医療の進展の中では、遺伝的つながりのない親子のかたちも多様化している。こうした中で、親子、家族の問題を子ども側から考えていくための知見を得て、発達支援システムの構築につなげたい。